

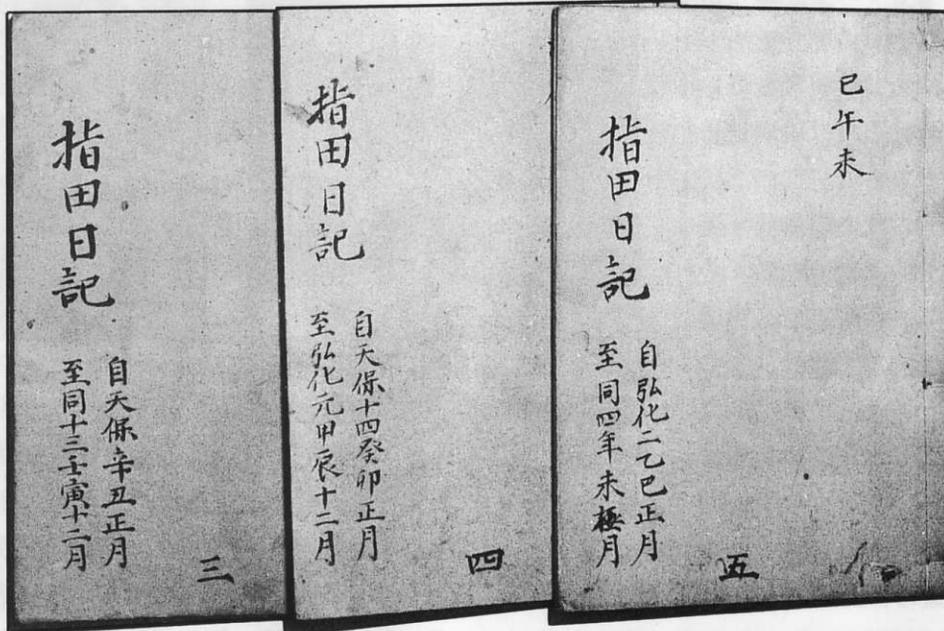
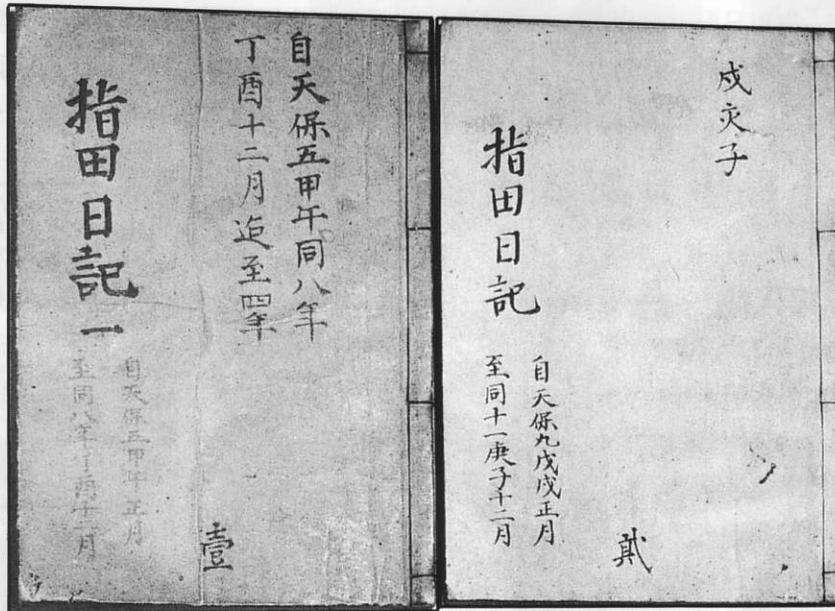
資料館だより

第 15 号

平成 3 年 10 月 1 日

編集・発行 武蔵村山市立歴史民俗資料館

武蔵村山市本町 5-21-1 TEL 0425(60)6620



市郷土資料「指田日記」

特別展示「^{さしだ}指田日記と^{せつつのかみふじあきら}指田^{せつつのかみふじあきら}撰津正藤詮」

期間 平成3年10月6日～12月8日

「指田日記」は中藤村原山（現武蔵村山市中央3丁目）に住まいした指田撰津正藤詮により記された日記です。江戸時代の天保5（1834）年から明治3（1870）年に至る37年間の出来事が全15巻に記述されています。その内容は武蔵村山市の歴史、風俗、慣習、産業状況など多岐にわたり、周辺地域の事件にも触れられています。市教育委員会では「指田日記」の資料的な価値を評価し、昭和51年に市文化財（郷土資料）に指定しました。

この度、所有者の指田和明氏の御好意により「指田日記」全巻をお借りすることができました。さらに、市内外に所在する指田撰津正藤詮に関連する資料も合わせて公開し、特別展示を開催することになりました。これを機会に武蔵村山市の歴史や文化財に対する理解が深まるよう念じております。

最後に今回の展示に際して、市文化財専門委員村山美春氏に指田日記と指田撰津正藤詮に関する解説をお寄せいただきました。ぜひ御参照ください。

指田日記とその著者指田撰津

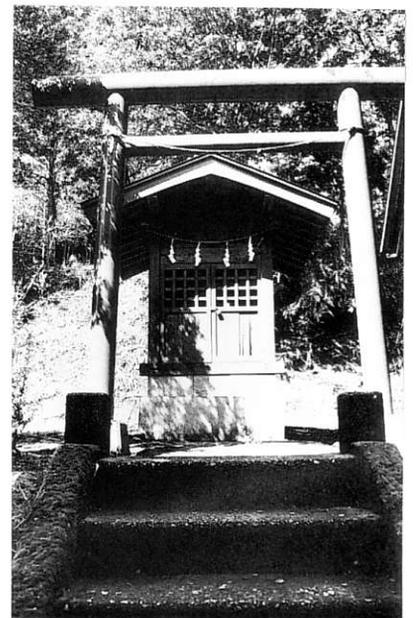
武蔵村山市文化財専門委員

村山美春

1. 指田撰津正藤詮の人物

指田撰津正藤詮は、寛政7（1795）年武蔵国多摩郡中藤村原山の指田家に生まれた。俗称は伝兵衛といい4代前の名を継いでいる。通称は謙造、諱は詮、撰州と号した。父は指田撰津福明と称し、文化5年1月26日、詮が14歳の時に52歳で世を去っている。このように父がすでに「撰津」の称号をもっていることから、詮も父の職掌を継いだものと考えられる。これは^{おんみょうどう}陰陽道に従事する者の称号であって、この陰陽道というのは、中国古代の陰陽説・五行説の上に立つ信仰的思想である。その思想的な基盤となったものは、陰陽五行説で、この抽象的な思想は、^{えき}易の思想と結びつくことによって具体的な占術となり、日本古来の^{ぼくほう}卜法とともに並び行われた。そして純粋な学問というよりは、むしろ現実的な生活の指針として重んぜられるようになった。中世には陰陽道の普及から、公武ともに用いられ、京都の^{つちみかどけ}土御門家が正統となった。しかし、室町時代以降は民間に埋没して、^{ぼくせんし}卜占師・^{かじきとうし}加持祈禱師などになっている。

詮もこの卜占師として、また加持祈禱師、神官とし



撰津が神職を務めた指田家の金毘羅宮（左）と原山神明社地の稲荷（右）

て身をたてたのであった。そして、江戸時代に入っ
てなお陰陽道の正統を継承していた土御門家に属し、支
配を受けたものである。天保14年4月28日の日記に、
詮は陰陽家取締、阿川伊豫正から呼状が来て、出願し
ていた撰津正の名乗りを許される機会に恵まれた。そ
の内容には御朱印を改めるので、青梅町旅宿まで印形
持参で遅れぬよう出頭しなさいとあった。翌29日、村

役人一人と共に青梅旅宿根岸氏で、阿川伊豫正と阿川伴七に面会した。手続と祝儀料等を納めて「指田撰津正」とその日から使える仮許状を頂戴した。

藤詮というのは、藤原氏であるから称したのか、中藤の一字を使用したのか、これらの事情は明らかではない。

通称の謙造は古老の間でも知るものがなく、近代になって撰津の墓に刻まれた辞世と、墓銘に「通称謙造」とあることによって判明したことである。

陰陽道の祈禱を修得して、正式に撰津正になったのは、嘉永6年11月23日「御許状頂戴」したときということになる。これより早くから、詮は人に頼まれて種々の占をたて、遠くは川越藩の者が家来を一人連れて訪問しぜい筮を乞う

たのでみてやったり、翌年も同人が来ているし、山口寺(山口観音)の使僧も占をしてもらうため訪れている。

詮は家にあっては百姓「伝兵衛」として、多く近隣の百姓の手を借りてはいるが、自ら農業に精励し、種子を蒔き、育て、収穫している。そして、若い時より同じ原山に住むきょうざん 陝山かんけい 斎藤寛卿先生について、学問、医術、諸道を学んでいる。

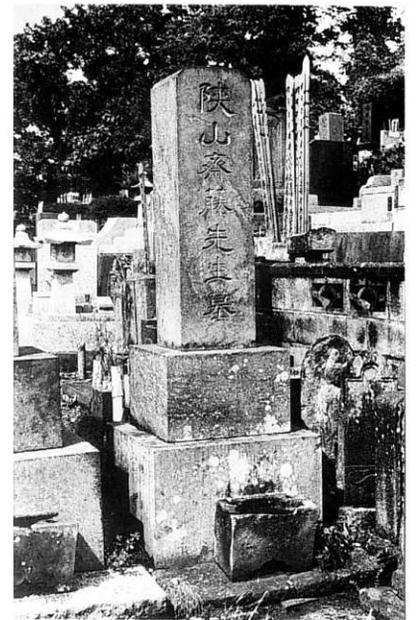
寛卿先生から教えを受けた詮は、先生亡きあとは次に自ら寺小屋を開き、近所、近隣在郷の子供たちの師となった。嫡男保十郎(宝重郎)の結婚式には子供衆を残らず招いて披露し、その2日後には筆門50人を招待して、引物として半紙「帖筆」一對宛を贈っている。これによって、弟子門人が50人の多きを数えたことがわかる。詮63歳の時のことである。のち詮の死後墓石に大きく「筆弟中」と刻んだのは、その門弟たちが師の徳を慕って筆塚を建立したもので、建碑に当たって門弟が関与したことがわかるのである。

詮がちょうど40歳になった、天保5年正月より始めた日記がある。明治4年夏この世を去る前年の12月まで、37年間毎日のように記されている。これは、戦後

2. 指田日記に見る主な出来事・事件

捨文騒動

天保7年11月28日朝、六ッ時(6時)に村中の者が名主の家に召集させられた。これは、前日に名指で打毀しの予告を紙に刷り、村々に捨文をした者がいた



指田撰津正藤詮の墓(左)と撰津の師斎藤寛卿の墓(右)

当主の好意で全15巻すべて公表され、その抜粋が「指田日記」として世に紹介出版された。これは詮にとって最高最良の遺物であって最大の功績であった。

詮はこの日記の第2巻の巻末に、中藤村の諸家系譜を書き記している。そこに自家の系譜を次のように書いた。

伝兵衛一次右衛門一伝左衛門一指田撰津福明一
一指田撰津介詮

これによって4代前までの系図がはっきりしている。そして、この時はまだ正の位でなく介であったこともわかる。このほか、日記を通じて些少でも他人を中傷したり蔑む態度がなく、他の私的記録に「第一につつしむ(虚言)諸事是よりおこる、又人をにくむ、うたがふ、おとしいる等皆是にあり」と自己を戒めている。

明治4年8月6日77歳の高齢で逝去。おくりな 詮を心月澄明居士という。70歳の辞世が2首刻まれ、詮の人柄を偲ばせてくれている。

此頃はふでとることもわすれけり

しらぬ旅路の門出いそげば

よしさらば朽ちやはてなんいつまでも

人に知られぬ谷の埋木

からであった。その文の内容は、青梅を初めとして所沢までの間、誰々の家を潰すべしと書かれ、また、徒党に加わる人々は秩父街道の四辻に集まれと記してあった。さらに、この辺の酒造業の者には、その街道の所

へ酒を付け送り、飯を炊いて運んで来いというのであった。「このような捨文の騒ぎは凶年につきもので、国々に多くあることであるから、思慮を欠くこれらの徒党の仲間にならないように」と名主から申し渡された。この捨文についての事件は、前夜のうちにお役所に届済みであったが、その日になっての村々の騒動混雑は大きくなっていった。青梅から所沢までの村で名指された人々はもちろん、道筋の商店やその近隣の家は、資財道具等を山林に隠したり、老若者を離れた他の村へ送ったりして周章狼狽しゅうしょうろうばいしていた。そして、四ツ半時（11時）に三ヶ島の者が、中藤谷ツ渡辺名主の所へ、「今朝青梅の吉野屋が打こわされた、その徒党が中藤村の方へも来そうである」と告げてきたのである。これを聞いた村人たちは、戦慄して大騒ぎとなり、ますます混乱がひどくなっていった。ところがその晩になって様子を見にいかせた者が帰ったので、事の真相を聞くと全くの虚説であった。それで、撰津はこのような時節には諸説紛々として混乱するから、よく事の本質を探って行動することが大切、と記している。

横田獅子舞一件

嘉永4年8月21日のこと、横田村と中藤村馬場では古くから獅子舞を出してきていたが、土俵の上で舞うことにした。ところが角力を行う方から申し入れがあって、土俵には砂盛りをし、そこに八幡様の幣束を安置し、清浄にしてある。その土俵に土足で上がって、踏み穢してもらっては困るというのであった。一方獅子舞をする方では、先年土俵上で舞った例があるから、他の所では舞をしないという。そこで仲裁者が入って宥めたけれども、獅子舞側は、行なわないと断ってきたので、恒例の事であるが獅子舞は中止となった。村の中での祭礼行事であるのに、両者折り合わなかった事件である。

黒船来る

嘉永6年6月11日、この月異国の船、亜米利加艦隊が相州浦賀に入ってきて、幕府は海岸所々を防備し、海防を堅固にした。しかし、このことで江戸に船が入ることができず、諸物価が高値になった。村々では、織物類の買物が少なく、値段が安くなって織る者が難渋なんじゅうした。そして、翌7年の1月16日には、亜米利加船が再来して、いろいろな評説がされていたし、その20日には村役人より「異国船が来航したので狼籍者の来こともあるかも知れない。その用意をしておきな

さい」と申し渡しが出された。ペリー来航の一連の事件であった。

安政の大地震

安政2年12月2日、夜四ツ時（10時）大地震のために土蔵が破裂した。余震は明け方までに7～8度もあった。江戸では各所で火災が発生し、わけても吉原付近が大地震に加えて大火事となって、生命のある者は1,000人につき2～3人に過ぎなかった。江戸中で20万人余の死者との知らせもあった。そして、翌3日の朝も地震があったが、昨夜の大地震のために十王堂の墓石が10のうち9つは倒れた。ところが、指田家の石碑は1つも倒れなかったという。さらに6日には、2日の大地震の後、昼夜にわたって3～4度ずつ揺れ、7日の夜五ツ頃（8時頃）余程の地震がまたあったのである。

慶応の打ちこわし

慶応2年6月12日、いわゆる慶応の一揆が起った。府内および在々所々で狼籍が始まり、穀屋や物持が破却はきやくされた。1日おいて14日には所沢で10余軒破却され、その打ちこわしの徒党等は、5色の幡（旗）を組々の目印に立て、人数600人余であった。翌15日は小雨で、打ちこわしの党は村々へ人足を当て、差出さない村があれば破却すると言ってきた。よって村々では恐れて人足を出した。この夜、青梅から長谷部新田の商家を破壊し、箱根ヶ崎に入り、福生村へ移動して破壊した。それから中神村縞屋しまやを破り八王子に向かおうとしたが、多摩川原に日野の農兵隊が控えていたので交戦した。そこで人足の者が10余人即死したため、一揆は散乱してしまった。岸村の五兵衛はこの時に召捕えられた。翌17日になると村の中には雑説がとび、その話もまちまちで、それがまた四方に広がって大騒動となった。そして18日、大沼田・柳窪を破却され、その流れが中藤村方面へも来るとの噂で人々は恐怖したが、結局来ることはなかった。また、引又（志木市）や上州筋（群馬県）で一揆打ちこわしの噂も立った。その月の18日、撰津は羽村の茂助方へ行く途中、岸村五兵衛宅に立寄り、五兵衛が今度の騒動で計らずも事件に遭遇そうぐうし、召捕えられて入牢したこの見舞をしている。

振武軍と飯能戦争

慶応4年5月3日のこと、仁義隊（振武軍）が所沢に入っている。翌日、この仁義隊が箱根ヶ崎に入り、隊員は300人という話が伝わった。「雨終日終夜やまぜ不止」

と日記にあり、梅雨時の長雨だったことを実証している。16日はこの日だけ「晴レル」とある。箱根ヶ崎にいた仁義隊は、前夜のうちに繰り出して江戸に行った。17日は江戸合戦、浅草正義隊、これも彰義隊のことで、この人々が箱根ヶ崎に脱走してきたという。さらに終日雨の18日、脱走兵は甲府へ行くと言って去った。22日の夜、官軍が扇町谷（屋）から飯能に入った。翌23日は朝より砲発の音が聞こえ、飯能戦争となり、町の中から並柳（双柳）へかけ戦場と化し、能仁寺ほか3か寺が焼亡した。

このため市中は残らず焼失して、官軍は勝利して退陣し、脱走兵は散乱した。24日に官軍は江戸に帰り飯能戦争も終結したのであった。

百観音騒動芝居の事

明治元年9月25日、慶応が明治となって18日目、中藤真福寺の百観音境内で増五郎が花会狂言（芝居）を開催した。翌26日も芝居があり、夜五ツ時（8時）御支配官軍より手入れとなった。

「御用、御用」ということで芝居は中断、花場棧敷

3. 指田日記に見る年中行事・まつり

日記に書かれた年中行事やまつりは、季節・月を決めての記録は特に見られない。そこで、1月から順に12月まで、行事とまつりに関係する項を拾ってみた。〈1月〉

年賀 新年を祝い、互いに訪問し合い挨拶をかわす。元日に始まり小正月まで来る人があった。摂津自身もこの回礼には名主家等を挨拶回りをし、また、訪問を受けた。日記を始めた天保5年は、「去秋ヨリ米穀高直、百姓困窮ノモノ多シ、依之村内年賀ヲ休ム、名主并拙宅は例年ノ如ク年賀の礼ヲ受ク」とあって、世の中の情勢で年賀を中止したり、復活したり、それでも特定の家は休まなかった様子がわかる。天保9年には「打続キ凶年ニヨリ四ヶ年ノ間村内年賀の礼ナキ所、今年は世間米穀ノ直ヒ少シユルミタルニヨリ如先例年賀ノ礼ヲ始ム」となった。天保14年の元日には、村中来テ年賀 酒一斗五升余」の記事がある。

節分 天保14年6月「セツブン 所々ヨリ裸参り金毘羅ニ来ル」とあるように、節分の行事として裸参りの行われたことがわかる。天保9年の1月10日は「節分……中藤・芋久保ヨリ裸参り五十余人金毘羅ニ社参」と見え、弘化3年にも「節分 正楽寺裸参り五十斗り来る」とでている。この12月18日には「セツブン、夜

に居合せた者が4人召捕えられた。突然の出来事で芝居見物の老若男女の混乱がひどく、人々は散乱し家路を急いだ。その中で源次郎の娘のおなみさんは、逃げる途中原山の六ツ指地蔵の前で、抜刀した何者かに切られて死んだ。この時おなみさんは娘といってもまだ子供で12歳の若さであった。切殺した者は誰であるかわからず仕舞である。

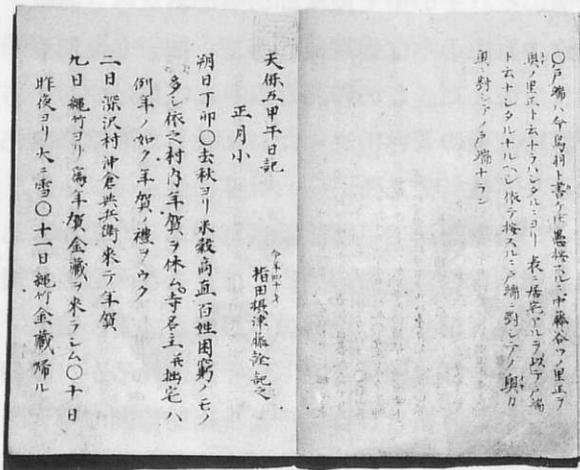
この騒動芝居で、何故手入れがあったのか。もちろん芝居当日、百観音の裏山では、そこかしこで博奕が開帳され、飛び交う金銭のやりとりの音が喧しく響いたという。この関係もあったと思われるが、真相は慶応4年閏4月17日、青梅橋と小川村の間で芋窪の人が追剝に出合い、10両ほどの大金を取られたことが発端とされている。この犯人はやがて治安維持のため部署についていた農兵に逮捕され、蔵敷前神送り塚で斬首刑になった事件が原因である。斬られた浪人風の男は八王子の岡ッ引の甥であったといい、それが遺恨で手入れが行われたということである。

小雨裸参り来ル」とあるので、節分の行事は旧暦では正月に先だて行われる時があった。

百観音縁日 1月17日が中藤百観音の縁日で、昔から馬が晴装束をして参詣する風習は、嘉永2年正月の17日、「中藤百観音ニ馬持中ヨリ馬ヲ出スベキ旨、先達テ沙汰アルニヨリ 遠近ヨリ引来ル馬二百五十疋ニ及ブ、参詣群集ス、是当年ヲ始メトス」と見える時からであった。翌年も「中藤百観音参詣群集ス」となり、今に続く百観音縁日の始まりと、その隆盛を伝えている。

講・日待 1月の講や日待は非常に多い。きめられた日の講としては「神農講」が19日に行われている。天保5年が初見で、「先生宅例格神農講、出席」があり、以降7年、9年、10年、13年。弘化に入って2年と3年に開かれている。神農講は医薬の神をまつり催す祭礼であるが、斎藤氏は医者であるから、近隣諸名士を招待してご馳走したのである。

その他の講や日待（日需の字が多い）は、観音講日需・疱瘡日需・恵美須講から肯師日需に至るまで、この1月に集中して行われている。日記の中で最も日待等の多かった年をみると、幕末慶応4年の元日に「門松ヲ立ル事ヲ止メ年礼ヲ休ス、此月日待六」とあり、



指田日記の書き出し部分

(納 指田和明氏所蔵)

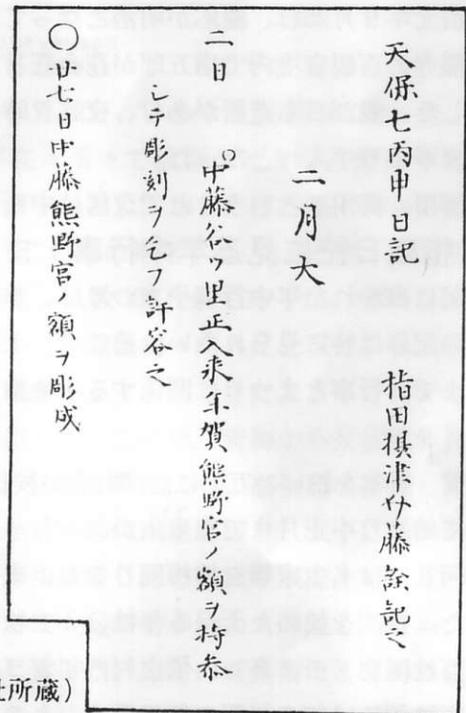
指田日記にみえる熊野

神社の額彫刻の記事



谷ツ熊野神社の額

(納 谷ツ熊野神社所蔵)

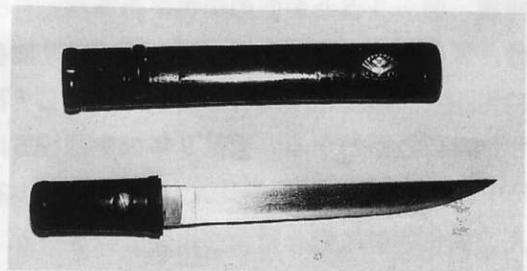


熊野神社の額裏面

指田撰津より譲り受け

たと伝えられる短刀

(納 神山美雄氏所蔵)

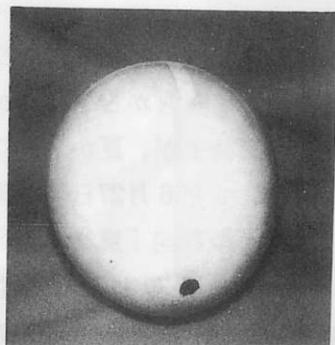
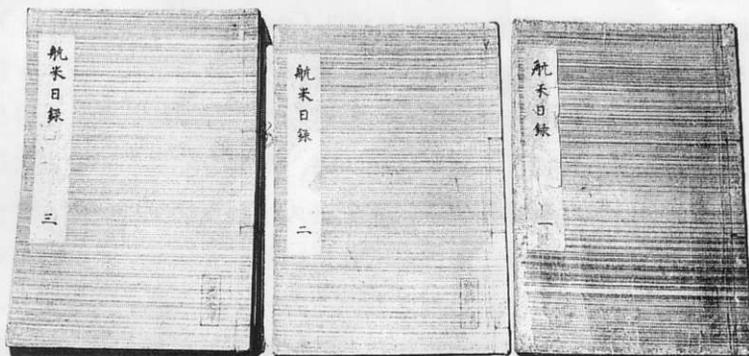




土御門家陰陽道口伝書〈指田撰津書〉
(納 指田和明氏所蔵)

航米日録〈指田撰津書写〉

(納 指田和明氏所蔵)



吉川緑峰〈画家、撰津の友人〉が

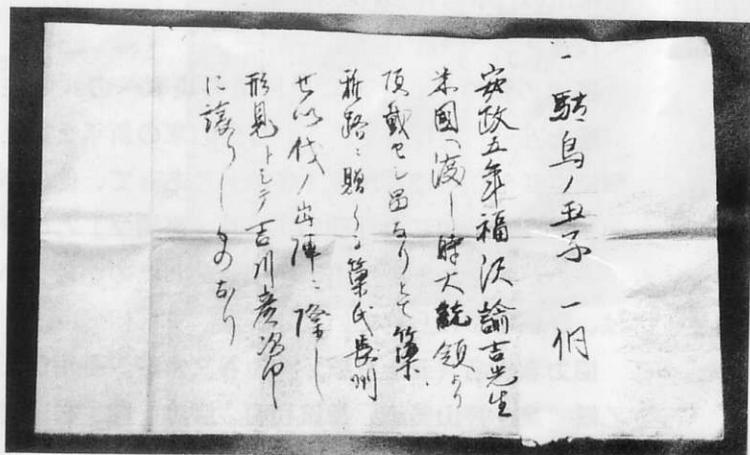
撰津に見せに来た「夕鳥の玉子」

(入間市立吉川忠氏所蔵)

「夕鳥の玉子」由来書

(入間市立吉川忠氏所蔵)

▼ 福沢諭吉が渡米の際持ち帰ったという



慶應三丁卯日記
正月小
○廿五日西久保画工緑峰異國ノ玉子ヲ持来ル大ッ如
氏

同、指田日記
中の記事

それぞれ産泰日待など記されている年であろう。ほかに4～5回の月も何年かみられるので、日を定めない講や日待を、年始めの農閑期をねらって多く行ったと思われる。

<2月>

^{ひょう}電祭り すでに渡辺美和翁が「中藤四差場の電祭り」と題して発表された行事である。このことが明治以前より行われていたことを日記が証明してくれる。天保6年2月2日に「電祭武兵衛宅」、天保8年2月6日「電祭・米穀高直ニヨリ神明殿中ニ集ヒ 電祭ヲナス寺名主ヲ不招請」とあって、中止はしなかったが内輪で行ったように見える。天保11年2月5日には「電祭ノ宿四郎兵衛宅当番、平左衛門、四郎兵衛、勝右衛門、撰津、才次郎……（以下5名略）」とあり、撰津家も当番にあっている。弘化2年2月10日「中藤電祭り、神明ヶ谷シナダマアリ 彼岸ニナル」というのをみると、この年は電祭りの日が彼岸の入りだったことがわかる。弘化4年2月17日「当年電祭ノ節、真福寺院主ヨリ名主衆ヲ以テ旦家葬礼ニ一切酒ヲ出スベカラザル旨申渡アリ、仏事ニ酒ヲ不用事至極ヨロシキ事ナレドモ此後又イカガアランヤ」とみえる。この一文から推測すると、電祭りに酒が振舞われたかどうか類推できないが、多分、美和翁の談話からは、酒はなかったように思う。

嘉永5年の2月3日になると「電祭宅庄五郎（庄五郎宅か）七人砂川村ヨリ加ル」というから、他村からの参加のあったことがわかる。安政7年は2月6日に「中藤電祭り」とあり、文久2年となると2月2日に「昨夜ヨリ雪、電祭与右衛門宅」とでている。現在の3月17日頃である。春の雪の日ということになる。元治2年2月12日「電祭当番源次郎」慶応2年2月12日に「故通亭宅ニテ電祭」翌年は2月6日に「惣右衛門宅ニテ村方電祭り、夜大風」その翌年が2月12日「電祭与右衛門宅」と行っている。

明治3年、これが最後の日記であり記録となるが、2月6日「電祭ノ宿才次郎宅、八太郎、源兵衛、万吉鴻斎（5名略）十軒加番、金五郎、辰次郎、伝九郎三人当年ヨリ混合不相成ニ付、小林民部祝詞ヲ申ス」と記されている。当番も10軒で受け持ち、維新前後の混乱する世相の中でも、なかなか盛会を続けたものであった。

<3月>

^{こぶ}古峯ヶ原（栃木県鹿沼市）代参出発 3月に入ると

まだ季節的に農業の忙しくなる直前、月末には蚕のはきたて等で忙しい日々を送ることになる。そこで、日数もそれほどかからない古峯ヶ原への講中が旅立つ。もちろん代参で村の者がくじ引きで数名選擇されることになる。

天保6年3月16日、「古峯ヶ原代参出立ノ連ニハ、指田撰津、七右衛門、馬場伝蔵、中村ノ利介、萩ノ尾四郎兵衛、赤堀ノ兼松、神明ヶ谷戸徳左衛門、藤七、^{すべて}都而八人、岩殿箭弓ニ参詣シ松山ニ泊ル」となる。

天保10年3月2日には、「権右衛門、出来蔵、古峯ヶ原代参出立」2人での代参旅である。それが9日に「古峯ヶ原代参ノ人々帰宅」となる。そして翌日は「古峯ヶ原日需」を開いている。次は嘉永4年3月20日、泰次郎、伊兵衛、古峯ヶ原代参する。こうして古峯ヶ原の代参も幕末には中止され、したがって「古峯ヶ原講日待」の記録も消えていってしまうのである。

3月は雛祭りや彼岸の行事があったわけであろうが日記にはその片鱗さへ記されていない。

<4月～5月>

農事の繁忙となる4月以降は、副業の養蚕で最も忙しい月、農産物の収穫、播種と蚕のヤトヒの記事が多い。そして、端午の節句の5月にはこれに関しての記述が全く見られない。

<6月～11月>

まつりとしては「鎮守太神宮祭礼」が8月にあり、若者による角力が行われている。1月から3月にかけての冬季農閑期に催された「日待」が、夏から秋にも時々行われていた。雨季の弘化3年6月27日「中藤四組原山天気祭り」とあり、この頃数回「風祭」が行われる。早天時の「雨乞（多く請雨と記す）」は最も多く、年によって趣向を凝らした出し物を繰り出しての村総出の行事も見られる。

<12月>

撰津の職掌柄、年末には同苗の農家への「^{かまじめ}竈注連（竈七五三）」を行っている。自分の家の新年を迎える準備も弘化2年12月26日「煤払」とあって、他の年に記載がなく、29日の日付で「正月ノ事調フ」との日記は多いが、どのような内容の準備をしたのかについては、詳細にふれられていない。

協力者氏名（五十音順） 池谷文太郎 石川伊三郎 乙幡 泉 神山美雄 指田和明 寺町 勲 村山美春 谷ツ自治会 武蔵村山市文化財専門委員 吉川 忠